



Title	ロシアよりアチョーをこめて : カンフー映画連環画に見る西洋人レスラーとの異種格闘技戦
Author(s)	中根, 研一
Citation	連環画研究, 9, 85-110
Issue Date	2020-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98487
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98487
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_9_85-110.pdf



ロシアよりアチョーをこめて

——カンフー映画連環画に見る西洋人レスラーとの異種格闘技戦——

中根研一

1. 連環画に見る異種格闘技表現

1-1 『大俠霍元甲』の異種格闘技戦

実在の武術家、霍元甲^{かくげんこう}（1868-1910）をモデルにした香港のテレビドラマ『大俠霍元甲』（1981）¹には、霍元甲が怪力ロシア人レスラーと公開試合で闘うエピソードがある。中盤のクライマックスとも言えるドラマ第12話で描かれるそのストーリーは、以下の通りだ。

時は20世紀初め。舞台は八カ国連合軍の外国人勢力が入り込んで久しい北京。街中の闘技場ステージでは「東アジアの病人を倒せ（打倒東亜病夫）」という横断幕と、「拳打世界弱国、脚踢東亜病夫（世界の弱小国を殴り倒し、東アジアの病人を蹴り飛ばす）」という対聯を掲げ、大男のロシア人レスラー（大力士）のポソフが中国人たちへ挑発を続けていた。実は彼はロシア大使の命を受け、中国人の自尊心と反抗心を挫くためにこのようなデモンストレーションをおこなっていたのであった。愛国心に燃える若者たちが挑むも、ポソフの怪力の前に返り討ちに遭うだけだった。霍元甲の弟子、劉振声^{りゅうしんせい}も飛行機投げで落とされそうになったところを、すんでのところ陳真に救出される。

これを知った霍懷山^{かくかいざん}（霍元甲の叔父）



ドラマ『大俠霍元甲』第12話より、怪力を誇るロシア人レスラーのポソフ。分かりやすいロシア帽と毛皮のベスト。



同、街の闘技場ステージで中国人格闘家をちぎっては投げ、次々いたぶるポソフ。

は翌日、老体に鞭打ってポソフに戦いを挑み、いいところまで攻め込むが、不幸にも闘技場のステージから蹴り落とされ、命を落としてしまう。

中国人と中国武術の名誉のため、叔父の敵討ちのため、ついに霍元甲は立ち上がる。そしてポソフとの公開試合に臨み、見事に勝利するのであった。

体格やパワーで劣る東洋人の格闘家が、その鍛えた技とスピードとで真っ向勝負し、ついにロシア人の大男を叩きのめすシークエンスは、それまで散々中国人や中国武術が侮辱される描写が続いていただけに、実に痛快だ。そしてロシア人レスラーを完膚無きまでに叩きのめし、場外へ蹴り飛ばして勝利する霍元甲の姿に、視聴者は劇中の中国人達と一緒に喝采を送ることになるのである。

試合開始から決着まで、映像では一分に満たない短い戦いだだが、連環画ではそれはどのように表現されているだろうか。今回はこの戦いを中心にみていきたい。

そして本作における、このロシア人との異種格闘技戦が持つ意味について、実在した武術家である霍元甲を巡る史実——実はロシア人との対戦はフィクションである——と照らし合わせつつ、他の霍元甲作品や、影響下にある物語も参照しながら考えてみることにしよう。

1-2 誌上再現！ 霍元甲 VS. ポソフ

ではまず、映像作品中のふたりの戦いを誌上レビューしてみよう。

映像では対決冒頭、霍元甲の連続手技をポソフが防御し続ける展開となる(映像1)。かわし切れずに胸に手刀を決められ、思わず苦笑いするポソフ。その後も霍元甲の素早い攻撃に劣勢となり、首に袈裟斬りチョップとヒジ打ちを連続で食らったポソフは後ずさり、立て掛けてあった檣に八つ当たりする。勢いに任せて反撃してきたポソフに右腕を掴まれるが、逆にそれを力でねじり返す霍元甲。ポソフは力で強引に回転させて霍元甲の背後に回り、両腕をつかんでねじ上げようとする。すぐさま霍元甲は前



【映像1】ポソフと霍元甲、ファーストコンタクト。目まぐるしい手技・足技の攻防。



【映像2】ポソフの頭上でトンボを切って後頭部に蹴りを入れるなど、空中殺法も次々飛び出す。

方宙返りで切り抜け、真上に飛び上がってボソフの後頭部にドロップキック一閃（映像 2）。逆上したボソフは霍元甲につかみかかるとステージの端まで押し込むが、霍元甲は必死に相手の胸毛を掴んで堪え、さらにはその胸毛を耨り取って（映像 3）窮地をしのぐ²。

さらに突進してくるボソフをかわし、顎を掴んで相手を回転させ、バランスを崩したところへ下段蹴り、顔面へ右フック。直後に跳び蹴りを決めて（映像 4）ボソフをステージから転落させてフィニッシュ。奇しくもこの跳び蹴りのフォームは、『大俠霍元甲』最終回における、弟子＝陳真が、主に外国人からなる警察隊へ向けて放つことになる決死の跳び蹴り³と相似形をなしている。人々は歓喜の声を上げながら霍元甲を胴上げするところでフィックスとなり、第 12 話の幕は閉じられるのであった。



【映像 3】舞台端に押し込まれた霍元甲はボソフの胸毛を掴んで耨り取り、反撃。



【映像 4】霍元甲はボソフを怒りの跳び蹴りでステージ下に蹴り落として決着。

1-3 三つの電影連環画『霍元甲』

まず使用するののは、ドラマ『大俠霍元甲』の劇中写真を使用した電影連環画である 1983 年発行の花城出版社版『霍元甲』（以下、花城版⁴）、同じく 1984 年発行の中国電影出版社版『霍元甲』（以下、中電版⁵）、さらに、直接それと明記はされていないが、同ドラマを下敷きにしたイラスト版電影連環画である 1983 年発行の嶺南美術出版社版『武術家霍元甲』（以下、嶺南版⁶）である。両者の対決を収録するのは、それぞれ花城版が第 4 巻、中電版が第 6 巻、嶺南版が第 4 巻だ。



○花城出版社『霍元甲』第 4 巻（1983）表紙

花城版の表紙は対決シーン冒頭の霍元甲の顔のアップを、左下に小さくロシア人レスラーに攻撃する霍元甲を、それぞれイラストで入れ込んでいる。

中電版は、両者が最初にコンタクトした瞬間の劇中写真をそのまま使用している。いずれもこの対決がこの巻の最大の見せ場であることをおおいにアピールしているが、嶺南版の表紙イラストだけは万里の長城を背景に蹴りを放つ霍元甲のみで、ロシア人の姿はどこにもない。

では、嶺南版ではその対決の扱いも淡泊かといえ、否だ。対決場面（試合直前～決着後の胴上げ）に限ると、花城版・中電版がともに 10 コマなのに対し、嶺南版では実に 28 コマも費やして戦いの様子を克明に描写しているのである。

では、それぞれの格闘シーンを比較してみよう。なお、前二者の図版は試合中の攻防場面に限って表 1 に掲載する。

まずは花城版である。試合開始直後は見下したような態度でつばを吐き、霍元甲に背を向けるボソフのカットから始まる。映像では無言なのだが、下の文を見ると「東亜病夫！」の捨てセリフを吐いたことになっている。対照的に敵を凝視しながら構える霍元甲のクローズアップが 1 コマ。

以降の対決場面は表 1 をご覧いただきたい。手技の攻防が 1 コマ。構える霍元甲が 1 コマ。ボソフに押し込まれてステージの端で堪える霍元甲のシーンが連続して 2 コマ。ボソフの胸毛を筆り取るシーンが 1 コマ。下の文では胸毛ではなく、肉をえぐったとある。そして早くもフィニッシュの跳び蹴りシーンが 1 コマ。ステージ下で伸びているボソフ、ステージ上で胴上げされる霍元甲がそれぞれ 1 コマずつ使われている。

以上の対決シーン全 10 コマ中、ふたりが同時に映っているのは、たった 5 コマだ。

次に中電版を見てみよう。試合当日の 1 コマ目は、「生死状」に署名をする霍元甲のコマから始まる。戦いに当たって、たとえ死んでも相手や主催者に責任を問わないことを約束する契約書だ。その後は決然としてステージ中央に立つ霍元甲のバストアップが 1 コマ。それに背を向けるボソフの姿が 1 コマ（花城版とほぼ同じ）。もう一度カットバックして、霍元甲の怒りの表情のアップが 1 コマ。次に両手を前に出して構え



●中国電影出版社『霍元甲』第 6 卷（1984）表紙



◆嶺南美術出版社『武術家霍元甲』第 4 卷（1983）表紙

るボソフの上半身アップが1コマ。実際にはここで既に戦いは始まっているのだが、その攻防は下の文で説明されるだけである。役者のクローズアップが多い中電版らしい構成⁷といえるかもしれない。

以降の戦闘シーンは表1の通り。全10コマ中、両者が写った戦いのシーンに限れば、ステージ端の押し合いの攻防と胸毛筆り、最後の跳び蹴りの計4コマのみ。

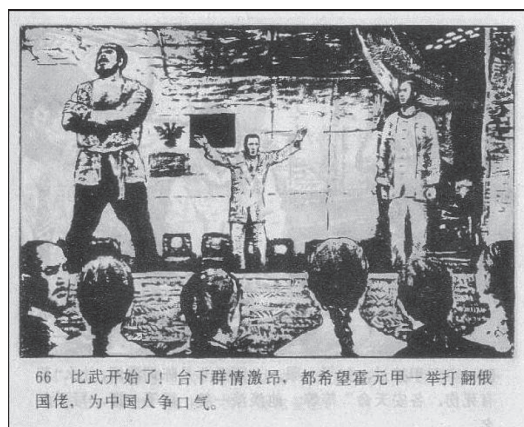
表1 ふたつの電影連環画の両者の対決全シーン比較

シーン	花城版（頁番号）	中電版
霍元甲とボソフ の試合開始直後 の攻防	 19 元甲的武功是霍家夫万万没想到的。他被打了几下之后，便知道对手非同一般。既不敢怠慢，周旋于西在元甲的横臂，元甲马上朝霍家夫的腹部重打一拳。把体肥肉多的霍家夫打退了几步。 (第19コマ)	なし
構える霍元甲	 20 元甲面对发了疯似的霍家夫，冷静地运气蓄势，严阵以待。 (第20コマ)	なし
舞台端の攻防	 21 几经交手，霍家夫利用自己高大的身体，将元甲迫到擂台边，突然抓住了元甲的左手，逼得元甲退下台去——  22 台下的观众吃紧不小。就在这紧要关头，元甲伸手抓住了擂台旁边的柱子，霍家夫怎能不紧元甲，就朝元甲抓住柱子的手打去，元甲乘机向前一靠，站稳了。 (第21-22コマ)	 121 几个回合，霍家夫使足力气，将元甲推到擂台边，要置元甲于死地。  122 元甲早有准备，他抽空一记霍家夫的肘部，霍家夫只觉胳膊一麻，力减大半。元甲乘机再朝霍家夫腹部击了一拳，把他送回擂台正中。 (第121-122コマ)

胸毛筆り攻撃	 23 元甲拳波索夫不备，伸手向他的胸口一抓，魔爪显示了神威——连皮带肉地扯下一块，波索夫痛得嗷嗷直叫。 (第 23 コマ)	 123 波索夫红了眼，象一头猛兽发疯般地扑向元甲。元甲使出魔爪神功，朝波索夫胸口一抓，连毛皮带下一块，波索夫痛得嗷嗷直叫。 (第 123 コマ)
フィニッシュの 跳び蹴り	 24 这时，波索夫大步迈前，完全处于被动，元甲将他引到背向台外，猛然跃起，双足尽力向波索夫胸自踢去。 (第 24 コマ)	 124 这时，波索夫的步法混乱，元甲越战越勇，一个落步虚晃，将波索夫打到擂台边，接着飞身跃起，用双脚踏波索夫胸前一蹬，波索夫就象个笨重的面袋，歪歪斜斜地摔下了擂台。 (第 124 コマ)

そしてイラスト版電影連環画である嶺南版である。同連環画は登場人物の造形から、各シーンの構図や事物等々、すべて『大俠霍元甲』の映像を基本的には模写しながらも、イラスト化の際に独自の表現も盛り込んでいる。一番大きな違いは主人公の霍元甲の姿だ。本編映像では現代風の髪形をしているが、嶺南版連環画では顔の作りはそのままだ。頭部だけ弁髪に描き直されている。これは実在した霍元甲を忠実に再現するための改変であろう。一方、ポソフの姿は映像そのままだ。

特筆すべきは、前二者の電影連環画版ではゴッソリ割愛されていた序盤の手技・足技の攻防が、動きや衝撃を表す効果線等を補いながらきっちりと描き込まれているこ



◆【嶺南版 図1】試合開始直前。映像ではカットバックで別々に映る両者が、ここでは一つのコマに収まっている。

◆【嶺南版 図2】ポソフをよめめさせる霍元甲の速射砲キックだが、これは連環画オリジナルシーン。



76 好个霍元甲，凌空发劲，一个筋斗越过对方头顶，就在将要落地的刹那间，双脚后蹬，正中“熊”背。波索夫没料到这一着，“哎哟”一声，扑倒在台柱边。

◆【嶺南版 図3】相手の頭上でトンボを切り、そのまま後頭部へ両足で蹴りをお見舞いするアクロバチックな技もきっちりと描いている。

とである。ただし、本編映像とは展開の順番を入れ替えている箇所や、映像には存在しない見せ場などが加筆されてもいる。たとえば、霍元甲の素早い蹴りを繰り出すシーン（嶺南版図2）は、残像効果を使って巧みに表現されているが、映像中にこのような攻撃は出てこない。

背後から両腕を取られながら前方回転→上空で後方宙返り→相手の後頭部へドロップキックという一連の空中殺法シーンも、2コマを使って分かりやすく表現している（嶺南版図3）。

舞台端の胸毛筆り攻撃に到る攻防も、イラストだと非常にクリアに理解できる（嶺南版図6）。

そして、肝心かなめのフィニッシュムーブは、5コマを費やして丁寧に描いている（嶺南版図10）。

実際の映像の構図に忠実に描いているのだが、時には加筆したりその順番を入れ替えたりして、結果的に全編両者の立ち位置が上下左右前後と目まぐるしく入



77 霍元甲快步跟进，伸手抓了波索夫一把胡须，痛得他哭爹叫娘。台下掌声如雷。

◆【嶺南版 図4】ボソフのヒゲを掴む霍元甲。これも映像では、次の舞台端の攻防よりも後のカットだが、連環画では前に配置されている。



81 霍元甲赶紧缩手。波索夫一掌砍到柱子上，越发恼怒，就势用肘横撞过去。

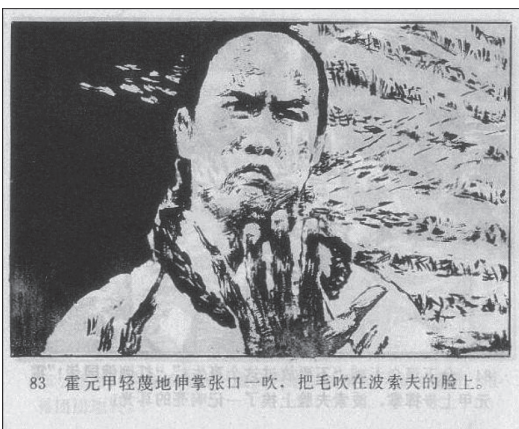
◆【嶺南版 図5】舞台端へ押し込まれる霍元甲。



82 霍元甲沉着气，避过来势，腾出左手，五指出击。这是练就的鹰爪功，一插五个洞，一抓一把肉！波索夫算是退得快，但已经丢了一把胸毛。痛得哇哇怪叫。

◆【嶺南版 図6】笔られる胸毛も丁寧に描き込んでいる。

れ替わることで、連環画の中にも躍動感が生まれ、その戦いの激しさと素早さがより
伝わる構成となっている。



◆【嶺南版 図7】掌の中の胸毛を吹き飛ばす霍元甲。◆【嶺南版 図8】平手打ちされたボソフの左頬に手形が。映像にある胸毛塗り直後の場面を加筆修正により、改変したもの。本編中にこのような攻撃はない。



◆【嶺南版 図9】体勢を入れ替えて連打。◆【嶺南版 図10】怒りの跳び蹴りでボソフをK.O！

1-4 電影連環画の難しさ

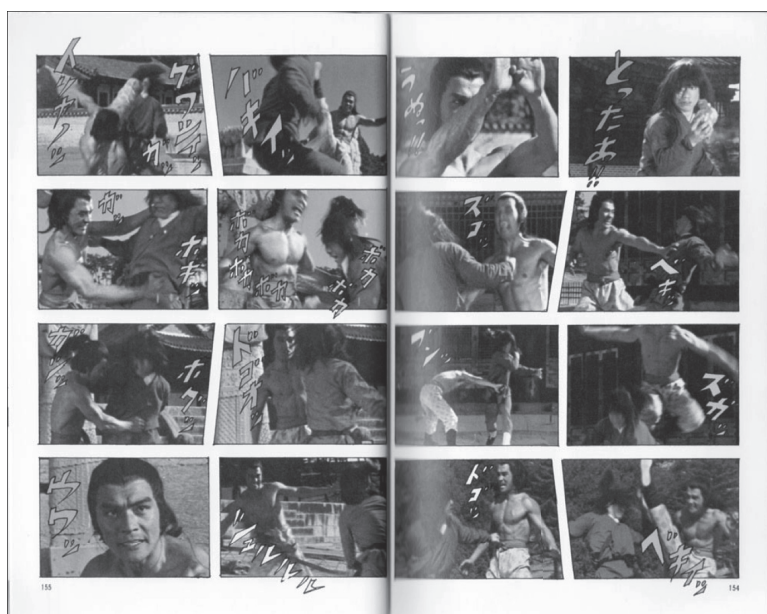
先に挙げた花城版の奥付には、「撮影」担当者の名前もクレジットされている。これは元となったテレビドラマのカメラマンのことではなく、この電影連環画制作に当たっての撮影担当者だと思われる。スクリーンかテレビ画面に映像を映し、直接カメラで撮影する作業は、当時のビデオデッキ等の静止画機能を利用としたとしても、難しいものがあつたであろう⁸。特に動きの激しいスポーツや、本作のようなカンフー物であれば、どうしても多少のブレは生じてしまう。デジタル化が進み、ハイビジョンや4Kが一般的になった現代においてさえ、スポーツ中継におけるブレの軽減・画質の向上は常に課題となっている⁹。

花城版・中電版とも、さすがにブレブレの写真を連環画のコマとして使うわけにはいかないため、格闘シーン中でも一瞬動きの止まる場面ばかりを抽出して採用していることが見て取れる。ただし、当然フィニッシュの跳び蹴りだけは省くことができないため、多少ブレても採用しているわけだが、中電版の場合は蹴り終わった霍元甲が後ろ向きで着地するタイミングの一枚となっており、これはどう考えてもシャッターチャンスを逃した、あるいは静止ボタンを押すタイミングをミスしたとしか思えない。

一方、イラストによる電影連環画である嶺南版は、劇中映像もしくは写真をそのまま参考にしながらも、絵師の筆によってブレは矯正され、さらにアクションの方向や技の衝撃を伝える補助線としての加筆をおこなうことで、映像の持つスピード感をさほど減じることなく、あるいは映像以上にダイナミックに漫画化することに成功しているとも言える。

今回紹介した電影連環画と同時期に、日本でもブルース・リーやジャッキー・チェン映画のフィルム・コミックが多数出版されていた¹⁰。ビデオソフトがない時代に作品を追体験するための代替物としての側面が大きく、非常にありがたい存在だったが、そこから具体的なアクションを想像するには、あらかじめ本編映像を見ていなければ理解の難しいスタイルのコミックでもあった。

思えばビデオデッキのない時代、カンフー映画やテレビのプロレス中継などはその場限りで流れて消えてしまう、一瞬のショーだった。今、映像で見たキックや飛び技は、具体的にどのようなフォームでどこに当たったのか、そしてどのように凄かったのか、瞬間的に、感覚的に理解して楽しむものであった。



ジャッキー・チェン主演『成龍拳』のフィルムコミック（秋田書店、1984）の格闘シーン

オノマトペの効果音＆本編映像にはない説明的なセリフ（「とったあ！！」等）で情報を補填するなど工夫しているが、こんな調子で延々150ページ以上続くのはなかなか壮観である

それを、『タイガーマスク』や『キン肉マン』といった数々のプロレス・格闘技の劇

画やマンガは、肉眼では捉え切れない技のありようをフィックスで呈示して見せてくれるのみならず、現実世界には存在しない効果線や記号などを用いて、現実以上に躍動感あふれるビジュアルを生み出してくれたのである。

個人的な体験に過ぎないかもしれないが、マンガで得た格闘スタイルの知識が、今度はまた現実のカンフー映画やプロレス中継を楽しむ際の補助輪のような役目を果たしてくれていたように思う。

2. 中国武術家 vs. 西洋人レスラー物語の背景

2-1 霍元甲映画の中の西洋人レスラー

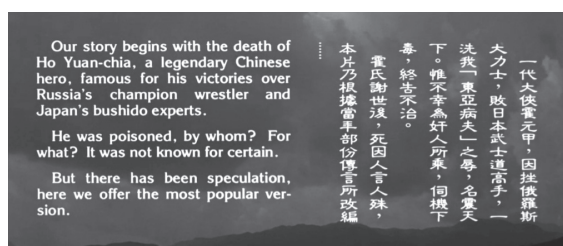
霍元甲とロシア人レスラーが戦った史実はないのだが、このような「伝説」が生まれたのは何故か？

1970年代以降の霍元甲人気は、ブルース・リーが霍元甲の架空の弟子、陳真を演じた『ドラゴン怒りの鉄拳』

(1972)の存在が大きい¹¹⁾のだが、その冒頭は「一代大俠霍元甲は、ロシア人レスラーを挫き、日本武士道の達人を負かして「東亜病夫」の恥辱を雪いだことで、その名を天下に轟かせた」というテロップとナレーションから始まる。

本編では死の直前に霍元甲は日本人と対戦し、勝利したという史実が触れられるが、ロシア人レスラーについてはそれ以上詳しく語られることはない。本作の大きな影響下で生まれた前日譚であるドラマ『大俠霍元甲』において、ロシア人レスラーとの対決を映像化したのは、必然的なことだったかもしれない。

それ以後も、霍元甲が登場する映像作品にはロシア人の格闘家が登場することになる。たとえば、1982年の香港映画『激突！ キング・オブ・カンフー (原題：霍元甲)』では、ロシア人ボクサーと戦いコテンパンに伸す若き日の霍元甲の姿が描かれる。



『ドラゴン怒りの鉄拳』(1972) オープニング



『激突！ キング・オブ・カンフー』(1982) の霍元甲 VS. ロシア人ボクサー。

ジェット・リー主演で日本でも公開された 2006 年の中国映画『SPIRIT (原題: 霍元甲)』では、1909 年に上海の競馬場内の特設リングで、西洋人（劇中の新聞記事表記からアメリカ人だと思われる）の巨漢レスラー、オブライエン¹²と対決して勝利する場面がある。



『SPIRIT』(2006) の霍元甲 VS. アメリカ人レスラー。

中国の連続テレビドラマ『霍元甲』(2001) でも、ロシア人レスラーと対決している。

2-2 霍元甲連環画の中の西洋人レスラー

『大俠霍元甲』以外にも、霍元甲の活躍を描いた連環画は複数存在する。そこでこの西洋人を打ち負かす霍元甲の「伝説」はどのように描かれているか、見ていくことにしよう。

まずは、まさに外国人格闘家との戦いをメインに描いた一冊本、『霍元甲擺擂台』(少年児童出版社、1983、以下「少児版」)である。巻頭の内容紹介では、八カ国連合軍の中国侵略後、世界列強のレスラーたちが中国に大挙襲来し、我こそは王だ覇者だと中国人を蔑視していたため、霍元甲は民族の尊厳のために立ち上がり、上海の闘技場で外国人レスラーたちと戦うと宣言したとある。ただし、その後に「それらのレスラーたちは恐れをなして次々に逃げ出し、誰も彼と手合わせをしようという者はいなかった¹³」とも書かれている。

そう、本作はロシア人やイギリス人レスラー¹⁴が出てくるものの、霍元甲とは直接戦わずに敵前逃亡するのである。ラストで日本人とは戦い、勝利し、直後に死亡する。

実は、この展開が史実に近いようである。



(7) 原来那斯契潘不仅自吹是“世界第一大力士”，还说“世界第二大力士为英国人，第三大力士为德国人……”



(14) 霍元甲这才语气庄重地说：“请你转告俄国力士，今天只有两个办法请他选择：一是与我比个高低；一是登报更正、检讨谢过。”那翻译啫啫连声说：“好，好。我请力士登报更正、检讨谢过。”

◇【少児版】ロシア人レスラーの中国人など齒牙にもかけない大言壮語に、怒りを覚える霍元甲。

◇【少児版】通訳に対し、ロシア人レスラーに自分と戦うか発言の撤回かを伝えるよう求める霍元甲。



(43) 上海确实有一个英国大力士在摆擂台。这个大力士不但力气大，能提起八百斤重的大铁钟，而且懂得中国武术，惯斗善搏。



(48) 这时候，正在上海的还有日本的相扑队、美国的角力队和法国的武术队。霍元甲看到他们在中国称王称霸，心里很生气，就分别向他们送了名片，要求与他们比武。

◇【少児版】上海に現われた力自慢の英国人レスラー。◇【少児版】その後、日本の相撲部屋、米国のレスリング、フランスの武術チームにも挑戦を続けるが……。

本作では、八カ国連合軍によって踏みにじられた故郷、天津の街を歩いていた霍元甲が、ロシア人レスラーが「我こそは世界最強」「2番はイギリス人で、3番はドイツ人だ」と発言していることを新聞広告で知るところから始まる。霍元甲は、くだんのロシア人レスラーの出場する演武場へ赴き、その通訳に対して「自分と戦うか、新聞で発言を撤回するか」の二択を迫る。結局、霍元甲の名前に恐れをなしたロシア人レスラーは、手合わせをすることなく、翌日の新聞で自分の発言を撤回して謝罪することになるのだった……。

また別の機会には、上海の演武場で話題となっていたイギリス人レスラーの存在を知り、試合の契約書まで交わしたものの、約束の試合期日になっても相手は現われることはなかった。さらにはその後、上海に来ていた日本の相撲力士、アメリカのレスリングチーム、フランスのマーシャルアーツチームなども、中国で覇を唱えようとしていることに怒った霍元甲は、それぞれに名刺を送り、他流試合を申し込むも、なんだかんだと言って逃げられてしまう。

しびれを切らした霍元甲は、中国武術の強さを証明するべく、自ら闘技場ステージを用意し、外国人格闘家の挑戦を受けるとの広告まで打つが、待てど暮せど外国人勢はやって来ないのであった……。

戦わずして勝つ、とはこのことか。それにしても本作の霍元甲は、愛国心からとはいえ、かなり好戦的な人物という印象だ。

もうひとつ、別の連環画を見てみよう。

1985年に出た全7巻本の『津門大侠霍元甲』(天津人民美術出版社、以下、「天津版」)である。第3巻「威鎮紫竹林」の表紙は、霍元甲と西洋人レスラーの姿が描かれており、早くも期待を煽るのだが、内容紹介にはこのようにある。

「[幽燕¹⁵] 三侠の一人、霍元甲は精武会を設立し、ロシア人レスラーを打ち負かした壮挙は遠く海外にまで伝わり、中国の革命家、孫中山の称賛も受けた。長年、霍元

甲の伝奇物語は諸説紛々で、牽強附会がはなはだ多い。本書は確実な史料や霍元甲の故郷に伝わる物語に依拠し、連環画として描き、編んだものである¹⁶」との一文がある。史実に忠実な連環画を謳っているが、では問題のロシア人レスラーとの一件はどのように描かれているだろう？

自慢の芸を披露しながら世界周遊中のロシア人レスラー、カーロフは天津に滞在していた。ある晩、身を寄せていた教会へ、霍元甲の弟子である劉振声が闖入した事件を、中国武術界からの挑戦だとみなしたカーロフは、翌日、天津の街中に「中華の武術は病人の国の取るに足らぬ技術であり、西洋武術に弟子入りすべし」の文言の書かれた広告ポスターを貼り出す。



■【天津版】第3巻表紙。ロシア人レスラーと対峙する霍元甲の姿が描かれている。



48 那强悍勇猛的洋人是俄罗斯帝国大力士卡洛夫，他周游世界露技卖艺。当年在法国卖艺认识了凯瑟神父，此次来津就住在凯瑟主持的教堂里。今日刘振声闯入教堂闹事，他认为是中国武林派来试探武功的，很生气。

■【天津版】ロシア人レスラー、カーロフは怪力の芸を披露して世界周遊する中で、天津へ来ていた。



49 第二天，津门各热闹处所贴出广告，上书：“中华之武功，不过是病夫国之薄技耳，当拜于西洋拳术之下……”下款签名卡洛夫。

■【天津版】天津の街中に張られたカーロフのポスターには、中国武術を挑発する文言が書かれていた。

既に何人もの中国人武術家がカーロフに倒されたと知った霍元甲は、公開試合を申し込む。ステージ上で鉄の鎖を引きちぎるパフォーマンスをしていたカーロフの前へ、霍元甲が飛び入りする。「私は病人の国の病人です。今日は自称世界一のレスラーと勝負をしにまいりました」と、手合わせを願い出た霍元甲は、カーロフの目の前で硬い鉄板を曲げ、鉄の鎖を粉々に引きちぎってみせる。焦ったカーロフ陣営は、今この場ではなく翌日の対決を約束する。

その夜、何者かが霍元甲の暗殺に侵入するが失敗。翌日、カーロフは帰国して試合放棄。ロシア人の強豪レスラーも霍元甲に恐れをなして逃亡した、という噂が広まることとなったのである。

「史料に忠実」を謳う本作においても、霍元甲はロシア人レスラーに「戦わずして勝つ」のである。



53 在喧闹的洋鼓洋号声里，他又将一根数丈长的铁练缠在身上，两边各站四个彪形大汉拉紧铁练，只见卡洛夫运气之后，猛地一声大喊，铁练绷断。观看的人都大惊失色，暗说：“这哪是人，简直是头疯狂的野牛！”



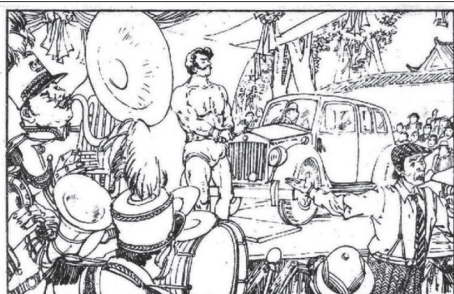
59 元甲放下铁板，又抬起铁练，施展鹰爪神力，丹田运气，那挂铁练竟如酥脆的麻花，节节脱落，铁屑纷纷落地……

■【天津版】観客の前で鉄の鎖を引きちぎるパフォーマンスを見せるカーロフ。 ■【天津版】カーロフの眼前で鉄の鎖を粉々に粉碎して見せ、翌日の決闘を約束させた霍元甲だが……。

また、この天津版第6巻でも、やはりイギリス人レスラー、オーピンが登場する。彼は上海の張園の演武場で、自動車で自分を轢かせて不死身の身体を披露するパフォーマンスのほか、中国人を相手にした他流試合もおこなっており、既に8人を倒したと豪語していた。

度重なる西洋人の傲慢な態度と中国武術への侮辱に耐えかねた霍元甲は、西洋人を相手にするためだけの闘技場のステージを作り始めるが、そこへオーピンら西洋人の集団が邪魔をしに現われる。霍元甲はオーピンのパンチを手で受け止めると、地面にねじ伏せた。明日の試合を約束してその場を去ったオーピンだが、霍元甲にはかなわないと悟り、夜陰に乗じて日本へと逃げていった。

新聞は、西洋人たちはみな霍元甲に恐れをなして戦おうとしないと書き立てた。そして霍元甲が用意した闘技場に挑戦してくる西洋人もひとりもおらず、その名は遠く遠く海外にも轟くことになったのであった。



32 进静安寺路不远，有一名叫张园的花园，园内高搭一擂台，只见英国大力士奥皮音正在台上表演汽车压身之技，洋鼓洋号齐鸣，好不热闹。



33 农劲荪指着擂台说：“你们看擂台上，写着何字？”众人望去，只见上面写着一个大大的“8”字。农劲荪说：“这数目，是奥皮音打伤中国人的人数，他扬言不凑够十二个人不收擂台费，要由中国人均摊！”

■【天津版】車の下敷きになり、不死身の身体をアピールする英国人レスラーのオーピン。 ■【天津版】演武場にはこれまで倒した中国人の人数「8」が誇らしげに掲げられている。



■【天津版】オーピンのパンチを止める霍元甲。



■【天津版】霍元甲の名は一躍世界に轟く。

実際の霍元甲の弟子、陳公哲^{ちんこうてつ}が書いた『精武会五十年・武術発展史』¹⁷などによると、霍元甲は西洋人レスラーたちと直接に試合をして決着をつけたわけではなく、相手が対戦を回避したことで霍元甲の不戦敗が重なっていったというのが事実に近いようだ。1909年春、上海の劇場——一説にアポロシアターとされる——でイギリス人レスラー、オーピンが中国人の挑戦者を募集し、それを新聞で知った陳公哲らが、同年3月に霍元甲と弟子の劉振声を上海に招聘したとされる。

陳公哲は、オーピン側の興行主と試合形式等について折衝を重ねたという。蹴りを嫌ったオーピン側はグローブ着用のボクシングスタイルを主張したが、最終的には投げ技ありのルールで決着。しかし、6月の試合当日になってもオーピンは現われず、仕方なく主催者はその場で飛び入り参加OKの霍元甲との手合わせを実施したという。先述の少児版連環画は、このエピソードを引用していることがわかる。ただし、これらの経緯にも諸説ある¹⁸。どこまでが伝説でどこまでが事実か、まだ判然とはしない。

そして、「西洋人レスラー」とされた彼らは、そもそも純然たる格闘家・武道家ではなかった可能性が極めて高い。

彼らが少児版や天津版の連環画で描かれたような力自慢のパフォーマンスを、実際におこなっていたのであれば、いずれの西洋人レスラーも19世紀末の欧米で広まった所謂「カーニバル・レスラー」のような立場の人々ではなかっただろうか？ 彼らはサーカス団の興業などについてまわり、力自慢をしたり、時には観客をステージに上げて試合をしたりもする、旅芸人のような存在だ。現代プロレスのルーツ¹⁹のひとつでもある。

とすると、本物の中国の武術家と戦って面倒を起こすことは避けたいという心理も頷ける。勝っても負けても、現地住民の反感・顰蹙を買うことになるわけで、それでは商売あがったりだ。上述の西洋人レスラーたちは逃げるように中国を去ったとあるが、商売をしづらくなった土地を離れ、巡業のために旅立ったということかもしれない。

い。

彼らにしてみれば、宣伝のために派手な謳い文句で大衆の好奇心を煽ることは常套手段であり、「世界最強」「怪力無比」などのフレーズも当然使うだろう。そして、その誇張表現が中国人の自尊心を傷つけたということもあったようだ。

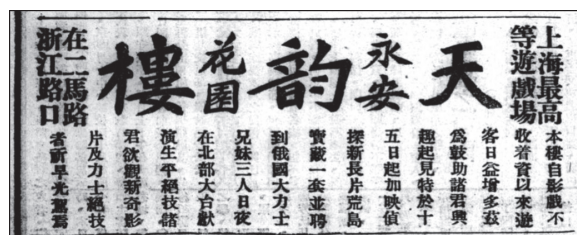
20 世紀初めの中国で、実際に起こった騒動を見てみよう。

2-3 20 世紀初めのロシア人レスラー「マカロフ」？

まず、中華民国期の中国において、しばしばロシア人の「大力士」がショーや演武をおこなっていたのは事実として確認できる。

たとえば、『時事新報』1922 年 3 月 15 日の紙面広告に、上海租界内の有名な遊戯場だった永安公司遊芸場の「天韵樓」の演目内容の説明があるが、その真ん中あたりをみるとロシア人「大力士」の演武があったことがわかる。

また、『蘇州明報』1932 年 6 月 30 日の記事では、ロシア人レスラー「^{マジャラ}馬嘉樂」が公園の映画館内でパフォーマンスをおこなうことを伝えている。



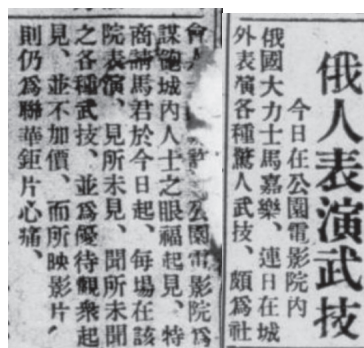
『時事新報』1922 年 3 月 15 日の紙面広告。

また、同一紙面の上段には雑誌の広告（記事上部欠損のため詳細不明）と思しき文言の中に、

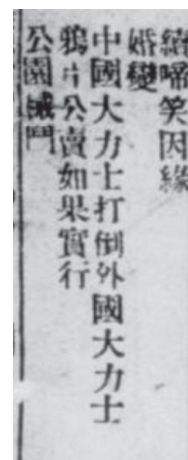
「中国人大力士が外国大力士を倒す」という一文も確認できる。そのような事実を伝える記事なのか、あるいは小説などの創作物のタイトルなのかはわからないが、今回はこのようなコピーが宣伝文句になる状況があったという確認にとどめたい。

そして興味深いのは、1934 年の出来事だ。

『時事新報』1934 年 11 月 7 日の記事では、ロシア人レスラーの「^{マイジャロフ}マカロフ」が、北平（北京）の武術家と親善試合をしたいと声明を出したことを伝えている。小見出しには「57 歳でいまだ独身／女性に興味なし」といったプチ情報も掲載されている。



『蘇州明報』1932 年 6 月 30 日記事。



『蘇州明報』1932 年 6 月 30 日の広告内に、「中國大力士打倒外國大力士」の文字。

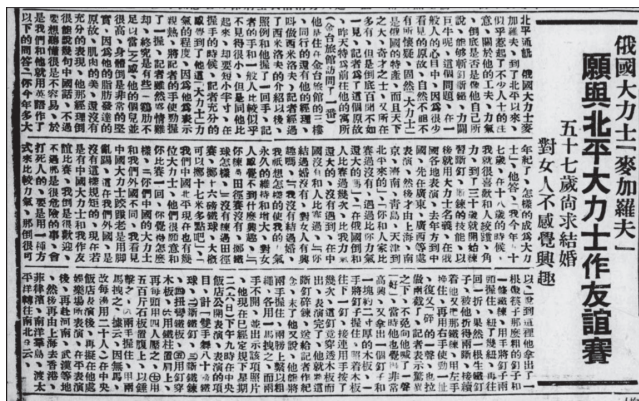
彼のパフォーマンスとしては、「鉄板を曲げる」「500 斤の石の板を腹の上に載せてハンマーで叩く」といった曲芸のような内容が紹介されている。中央飯店でのパフォーマンス後は他の遊藝場を回り、河南、武漢、上海、香港の各地を経て、フィリピンや南洋の島々を巡業して回ると書かれ、記事は結ばれている。やはり、これは格闘家というよりは旅芸人の類に近い。この記事自体も宣伝の意味合いが大きかったろう。

「北平の何人かの武術家が対戦したがっているがどう思うか」という記者の質問に対して、麥加羅夫は「中国武術ではむやみに足で蹴ってくるが、我々外国の場合はそのようなルールはない。中国人武術家の挑戦は歓迎するが、とても危険なので死人が出るかもしれない。もしある一定のルールを決めて力量を競うのであれば可能だろうけどね」と答えている。少なくともこの記事を読む限りでは、決して自分から挑発したわけでも、見下すような表現をしているわけでもないことがわかる。

「蹴りを嫌っていた」ということに関しては、霍元甲との対戦ルールを決めるにあたってオーピンも同様なことを主張していたことが思い出される。「蹴りと西洋人」と言えば、映画『ドラゴン怒りの鉄拳』のラストシーン、主に外国人からなる警官隊へ向かって、精武館の入り口で高く飛翔して「跳び蹴り」を放つ陳真（ブルース・リー）の姿が、そこに少し重なる²⁰。

さて、この記事の一週間後、『東南日報』1934 年 11 月 14 日の記事に、くだんの麥加羅夫が、病気を理由に中国人武術家の対戦要求を断ったとする見出しが躍る。

記事は前日 13 日の午後 6 時に、武術家の沈友三らが麥加羅夫のもとを訪れ、手合わせをお願いしたものの、上記の理由で拒まれたことを伝えている。ショーを主催する責任者の主張とし



『時事新報』1934 年 11 月 7 日記事。



『東南日報』1934 年 11 月 14 日記事。

ては、中国武術は世界一であると聞いているということ、今回来たショーはパフォーマンス的な性質のものであること、決して「中国の武術家はロシア人レスラーにはかなわない」などとは発言していないということ、新聞に掲載された「中国武術家と試合をしたい」という一節は誤解である、ということであった。今後は大口叩くなよ、という沈友三の言葉も紹介している。

先に見た連環画で描かれた霍元甲の伝説を想起させる事件だ。新聞記事でロシア人レスラーのビッグマウスを知り、怒るという流れまで一致している。

しかも話はここで終わらない。

翌 1935 年 7 月 21 日『東南日報』には、ロシア人レスラー「馬嘉楽夫」が杭州で怪力パフォーマンスをおこなうといった記事が掲載される。例によって様々な演目が列挙されているが、最大の目玉はその十番目に挙げられた猛牛との対決で、インパクト満点のイラスト付きで掲載されている。ちなみに中国人武術家との対戦も十一番目に挙げていた。

記事の末尾には、「編者が按ずるに……」として、「馬嘉楽夫はかつて北平でショーをおこなった際、中国人武術家が対戦を申し込んでも、あれこれ理由をつけて応じず、非常に狼狽していたという。今回は杭州に来るが、杭州の地には多くの中国武術の達人がおり、手合わせは避けられない」とのコメントが添えられている。

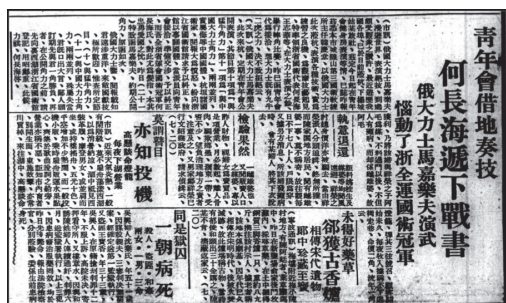
この北平のエピソードから考えるに、杭州に来た「馬嘉楽夫」と、前年の記事に出てくる「麥加羅夫」は同一人物と思われる。さらには冒頭で紹介した 1932 年の『蘇州日報』記事にある「馬嘉楽」も、あるいは彼かもしれない。いずれも発音が近い。

さて、編者の煽りを受けてのことかどうかはわからないが、翌 22 日『東南日報』に、中国人武術家の何長海が馬嘉楽夫に挑戦状を叩きつけたとする記事が載る。義憤に駆られた最大の理由は、前日の記事にあった演目リストで、要約すると「牛との対戦と、中国人武術家との対戦を同列に論じるとは何事か!」ということであった²¹。

同じく『東南日報』同年 7 月 24 日記事では、一連の騒動を受けて謝罪した馬嘉



『東南日報』1935 年 7 月 21 日記事。



『東南日報』1935 年 7 月 22 日記事。

楽夫の手紙を、全文掲載している。そこには「貴国の国情をよく知らず、通訳による誤訳もあり、誤解を招いてしまいました」とあり、事実とすれば少し気の毒になる。

ちなみに馬嘉楽夫は同 26 日に杭州を離れて上海へ向かったと、『東南日報』7 月 27 日の記事が伝えている。既に充分稼いだこと、元々ショーは三日間の予定だったこと、場所を貸してくれていた青年会が借用を認めなかったことが書かれているが、どこまで本当かわからない。と同時に、「既に充分稼いだ」という一文が気になる。図らずもトラブルがいい宣伝になったということか、それとも……？いろいろと妄想が膨らむ事件ではある。

上述のように、新聞に謝罪文を載せるのも、先に見た連環面の霍元甲のエピソードに似ている。あるいは、ここに挙げた事件以外にも当時は同じようなケースが多かったのかもしれない。

興味深いのは、真実はどうあれ「ロシア人レスラーに中国武術を侮辱された」という言説が生じた後、義憤に駆られた中国人武術家が立ち上がって挑戦の意を示し、その後、相手の新聞紙上での公的謝罪・逃亡という形をもって雪辱する、というパターンがそこにあることである。逆説的ではあるが、外国人からのネガティブな評価が、結果的に中国人と中国武術に勝利のカタルシスをもたらしていたとも言えるかもしれない²²。

2-4 中国映画『武林志』のロシア人レスラー

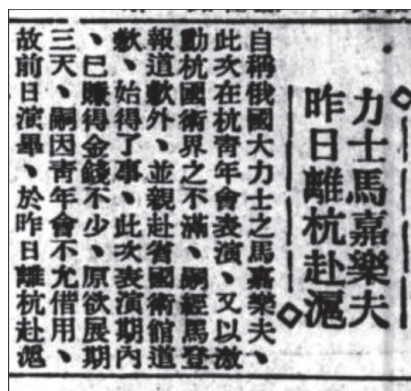
実は、本稿で紹介してきた霍元甲のロシア人レスラー退治と、非常によく似た構造を持つ中国映画が存在する。1983 年に公開された『武林志』（張華勛監督、李俊峰主演）である²³。

物語は以下の通りだ。

時代は清末民初。八カ国連合軍の侵攻以降、主人公の東方旭は流浪の旅を続けながら、妻や子供たちとともに路上で武芸を見せることで日銭を稼いでいた。天津に流れ着いた東方旭は、ストリートファイトを通じて神州武術館館長・何大海とも奇妙な友情で結ばれるようになる。



『東南日報』1935 年 7 月 24 日記事。



『東南日報』1935 年 7 月 25 日記事。

ある時、天津へやってきたロシア人レスラー「^{ダダロフ}達得洛夫」らが中国人と中国武術を侮辱するような宣伝をおこない、ちんどん屋に街を練り歩かせた。彼の父は八カ国連合軍に参加した際に戦死しており、中国人を憎んでいるのだった。

それに怒った何大海はその看板を破壊。その後、ロシア陣営と神州武術館の公開の勝ち抜き戦をおこなうことになった。何大海がロシア側の次鋒に勝利し、いよいよ大将同士の戦いというところで、時間切れ。後日再開となった。しかし、その帰り道、何大海は暴漢に襲われて重傷を負ってしまう。

中国武術の名誉のため、何大海との友情のため、東方旭は「生死状」にサインし、「達得洛夫」との一騎打ちに臨み、見事勝利を収めるのであった……。

本作は人気となり、その後、複数の電影連環画が発行されている²⁴。

「中国初の本格カンフー映画」と評されることも多い本作だが、上記の通り、舞台が天津であることも含めて先に見た霍元甲のエピソードとストーリーの類似性が顕著だ。ドラマ版『大俠霍元甲』は、



電影連環画『武林志（下）』（中国電影出版社、1983）表紙。ロシア人レスラーをぶちのめす！



99 大街上，一支乐队抬着广告牌吹打打过来。牌子上画着一个胸前挂满奖章的俄国大力士举着拳头，一个留辫子的中国拳师被打得即将倒地，帽子也打飞了。

ロシア人レスラーが弁髪（べんぱつ）の中国人武術家を殴り倒す大看板を掲げ、練り歩くちんどん屋。劇中スチル写真を使用した電影連環画『武林志（上）』（中国電影出版社、1983）より。



67 经过精心策划，由长号、大鼓和小鼓组成四人乐队，后面是一幅大幅广告，上面画着俄国大力士把留着辫子的中国拳师打倒在地。他们一路上吹吹打打，径直向神州武术专馆走来。

連環画『武林志』（人民体育出版社、1982）のちんどん屋の場面。



51 何大海带着徒弟迎面走来，扫了一眼广告，只见上面画着俄国大力士把一个留辫子的中国人打倒在地，不禁怒发冲冠。

連環画『武林志』（嶺南美術出版社、1983 年）のちんどん屋の場面。

もうひとつ、『武林志』ではこの対決を 1900 年の八カ国連合軍侵攻から 16 年後、つまり 1916 年の出来事として語っているが、霍元甲が西洋人レスラーたちと戦ったとされる 1901 年から 09 年にかけてよりも、時代的に少しだけ下っているのも気になるところである。

『時事新報』は、1918 年 4 月に連日のように「康泰爾」の出場する興業や、中国人との異種格闘技戦の様子などを詳細に報じている。4 月 5 日の同紙には、「康泰爾」の曲芸として「手で鎖を引きちぎる」「車に自分の身体の上を轢かせる」といった演目を



紹介している他、「対戦して 20 分以上持ちこたえた者には 50 元を与える」といった文言も確認できる。そして「両肩を地面に三秒以上つけられたら負けとなる（以双肩貼地逾三秒鐘為負）」というルールも明文化されている。そう、「康泰爾」は正真正銘「カーニバル・レスラー」だった。

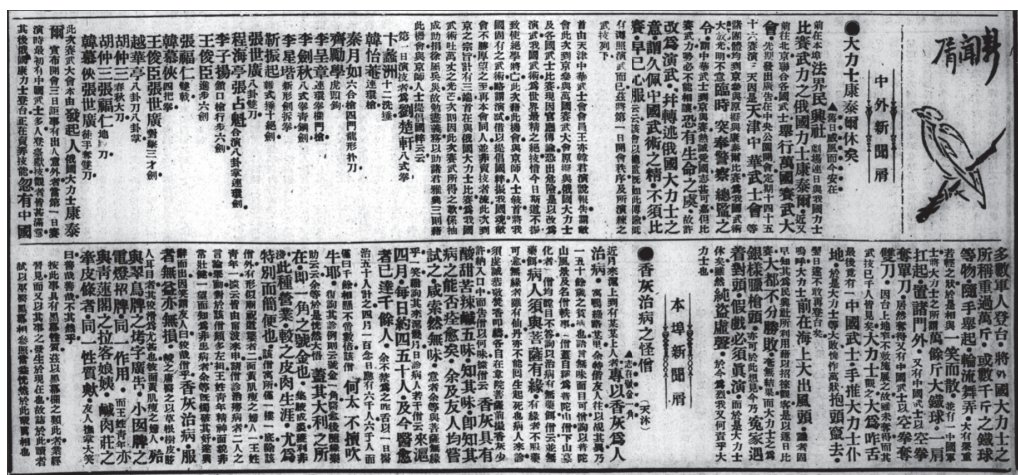
賞金目当ての者、名を上げたい者たちが、この機に乗じて次々と挑戦していったことが記事からはわかる。そして、戦いの途中で閉館時間となり、対戦が延期されることもあったようだ。映画『武林志』でも、同じような場面が描かれていた。

この時は無敵ぶりを発揮していた「康泰爾」だが、同年 9 月 19 日の『時事新報』には「大力士・康泰爾休場／昔日の威風、今いずこ」という見出しの記事が掲載された。それを読むと、9 月 14 日、北京の中央公園でやはり同じようなパフォーマンスをおこなっていた「康泰爾」に、天津中華武士会の面々²⁶がやってきて対戦を要求。勢いに気圧された「康泰爾」は、対戦ではなく演武に変更しようと提案した。曰く、中国武術の素晴らしさには感服しており、戦う必要はないとのこと。

そこで天津中華武士会の面々はそれぞれの技を披露し終え、さて「康泰爾」のパフォーマンスという段になって、多数の中国の軍人達がステージに乱入し、「康泰爾」の数千斤もあるという重い鉄球などを軽々と弄び始め、大笑いして去っていった。驚愕した「康泰爾」は、ひとりの中国人武術家に地面に押し倒されてしまったという。面目を潰され、大敗を喫した彼は「頭を抱えてこそこそ逃げていってしまい」、翌日再びステージに上がることはなかったという。

これらの描写は、先に見た連環画『津門大俠霍元甲』（本稿 2-2 を参照）で、霍元甲がロシア人レスラーに対しておこなった仕打ちそのままだではないか？

実は、この事件の時の天津中華武士会メンバーの中には、周恩来の武術の師匠でも



『時事新報』1918 年 9 月 19 日記事。

あった韓慕俠かんぼきょうの名前があり、このため彼もまた「ロシア人レスラーを倒した男」と称されることがある。

韓は貧しかった時代、親日家である軍閥のボディガードの仕事を破格の給料で紹介されたもののそれを潔しとせず、自らの左手の骨を砕いて「できません」と断ったというエピソード²⁷が伝わっているが、これは映画『武林志』前半で、主人公の東方旭がとった行動とまったく同じである。これらの逸話を勘案するに、『武林志』における東方旭の直接的なモデルは、天津中華武士会の韓慕俠であったと考えられる。

後世の霍元甲の伝説で、彼ひとりのものとされる「偉業」は、実際にはおそらく別々の時代に複数の人々によっておこなわれたエピソードを編集して作られたものである可能性が高い。最後に紹介したロシア人レスラー「康泰爾」と天津中華武士会の「事件」は、やはり天津出身だった霍元甲と結びつきやすかったことだろう。仮に霍元甲が本当にロシア人レスラーと戦っていた——もしくは戦おうとしていた——としても、伝説化されたその戦いの細部には同時代、もしくは後の時代の様々な類似エピソードの記憶が紛れ込んでいる。

上述したインパクトのある「中国人がロシア人に勝った」エピソード群は、つらい時代を過ごした当時の人々にとって誇らしい出来事として、おそらく強く記憶に刻まれたに違いない。それが、やはり天津を舞台にしたもうひとつの英雄譚『武林志』を生んだのかもしれない。霍元甲伝説から直接『武林志』が誕生したのではなく、同じルーツから二つの物語が生まれたのだと見るほうが自然ではないだろうか。

2-6 今に続く「西洋大力士」たち

戦後日本の大衆娯楽のひとつとして、街頭テレビのプロレス中継があった。

ブラウン管に映し出された東洋人が、大きな白人たちをバツバツと倒していく姿に人々が熱狂し、歓声を上げた時代があった。大相撲出身の力道山が柔道出身の木村政彦と組み、カナダ人の大男・シャープ兄弟とタッグマッチをおこなったのは1954年。日本の経済白書に「もはや戦後ではない」との文言が載る2年前のことである。興行の中で悪役を演じたシャープ兄弟は日本中の憎悪の対象となったが、本人たちは大の親日家であったという。

20世紀初めの中国で、驚異的な芸を披露しながらも、たびたび悪役として新聞をにぎわし、最終的に中国人武術家たちに「勝ち」を譲って「逃げていく」西洋人レスラー（カーニバル・レスラー）たちの物語は、どこまでが事実で、どこからが虚構なのであろう。いずれにしても、傷ついた自尊心を手っ取り早く慰撫するひとつの手段として、このような構図は好まれ続けており、枚挙にいとまがない。昔は演武場や劇場、新聞などのメディアで、そして今は主に映画やドラマの中で。そこにリアルとフェイクの線を引くことはできるだろうか？

19 世紀末に実在した上海のギャング馬永貞^{ばえいてい}を主人公にした香港ショウ・ブラザーズの映画『上海ドラゴン英雄拳（原題：馬永貞）』（1972）では、舞台上から中国人を挑発しては返り討ちにする力自慢のロシア人レスラーが登場する。劇中、馬永貞が彼に戦いを挑み、痛快にぶちのめす見せ場があるのだが、実際はそのような戦いの記録はない。

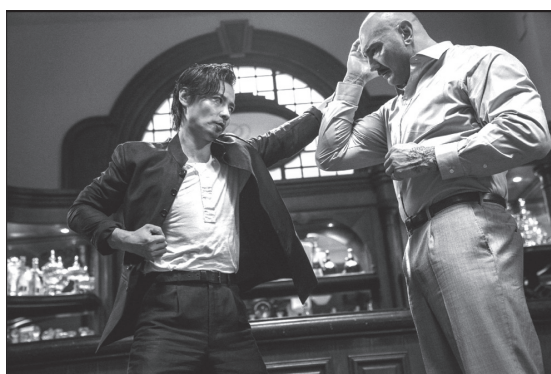


映画『上海ドラゴン英雄拳』（1972、香港）より、ロシア人レスラーと闘う馬永貞。

ブルース・リーの師匠でもある実在の武術家、詠春拳^{えいしゅんけん}の葉問^{ようもん}を描いて大人気となったイップ・マンシリーズも、もはや史実を超えた架空のストーリーで続編を作り続けている。第3作目『イップ・マン 継承』（2015）では、とうとうあの元プロボクシング世界王者のマイク・タイソンとの対戦も実現した。同スピンオフの『イップ・マン外伝 マスターZ』（2018）では、元 WWE のプロレスラーでいまやハリウッド俳優のバティスタが悪役として登場している。



映画『イップ・マン 継承』（2015、香港）より、イップ・マン（ドニー・イェン）対アメリカ人フランク（元プロボクサーのマイク・タイソン）。



映画『イップ・マン外伝 マスターZ』（2018、香港）より、張天志（マックス・チャン）対イギリス人オーウェン（元プロレスラーの俳優バティスタ）。

一方、1960 年代のハリウッドを描いたクエンティン・タランティーノ監督のアメリカ映画『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（2019）の中では、アメリカ時代のブルース・リー（演じるのは東洋系アメリカ人俳優マイク・モー）はビッグマウスの傲慢な男として描かれており、ブラッド・ピット演じるスタントマン俳優に投げ飛ばされ



『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（2019）より。いいところのない「ブルース・リー」。

るシーンまでである。この扱いにリーの実の娘シャノン・リーが激怒。中国での公開にあたっては当該シーンの全面削除もしくは再編集を求めたが、タランティーノは拒否。結局、中国公開予定だった10月25日の一週間前に、同作の中国での劇場公開は無期延期となってしまった。公式な延期理由は発表されていない。

ちなみに、 IPP・マンシリーズ最新作の『IPP・マン 4 完結編』では、ブルース・リーに招かれて渡米した IPP・マンが、サンフランシスコのチャイナタウンの抗争に巻き込まれ、リーとともに米海軍を相手に戦うようである。時代はちょうど『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』と同じ1960年代。あるいは、映画を通じて何らかのリベンジがおこなわれるかもしれない。

＊

今回、連環画をきっかけに清末民初の中国武術と西洋人レスラーの戦いについて調べ始めたが、興味は尽きず、様々な疑問も湧いてくるばかりである。霍元甲の様々な伝説²⁸についても、さらなる検証が必要である。今後も引き続き、物語の中の異種格闘技戦を追っていきたいと考えている。

¹ 同作と、それを連環画化した作品については、拙稿「消えた怒りの跳び蹴り——ふたつの電影連環画『霍元甲』考察——」（『連環画研究』第7号、2018年3月、所収）をご参照いただきたい。

² この後、指に残ったボソフの胸毛を息を吹きかけて飛ばす描写があるが、これは香港映画『ドラゴンへの道（猛龍過江）』（1972）のクライマックスの戦いで、ブルース・リーがアメリカ人チャック・ノリス相手におこなった行為へのオマージュであろう。

³ 前掲拙稿「消えた怒りの跳び蹴り——ふたつの電影連環画『霍元甲』考察——」参照。

⁴ 全5冊。羅納之編文、方平、梁慶撮影。1冊あたりの物語のコマ数は158～190。

⁵ 全10冊。索立改編。1冊あたりの物語のコマ数は123～125。

⁶ 全6冊。連力改編、紹城・華尖絵画。1冊あたりの物語のコマ数は158。

⁷ 前掲拙稿「消えた怒りの跳び蹴り——ふたつの電影連環画『霍元甲』考察——」参照。中電版は役者のアップが多く、花城版は寄り引きのバランスが比較的とれた構成になっている。

⁸ 当時のこのような電影連環画の撮影・制作状況については、かつて中国電影出版社で編集部主任を務めていた王家龍の著書『樂此不疲 我的連環画收藏生涯』（陝西人民美術出版社、2009）に詳しい。中には映画に理解のない者が撮影・編集を担当することもあり、王はそれが不満だったと述べている。

⁹ 動きの速いスポーツ中継を見るには、かつてはプラズマテレビが、今は有機 EL ディスプレイなどが適しているとされてきたが、テレビ画面の画質向上は常に課題として存在し続けている。

¹⁰ 拙稿「中国ウルトラ漫画の世界——ヒーローたちの電影連環画とフィルム・コミック——」（『連環画研究』第6号、2017年2月、所収）参照。

¹¹ 前掲拙稿「消えた怒りの跳び蹴り——ふたつの電影連環画『霍元甲』考察——」参照

¹² 演じているのは、オーストラリア出身のプロレスラー、ネイサン・ジョーンズ。

¹³ 同書巻頭。原文は以下の通り。「那些洋力士吓得纷纷躲避，谁都不敢与他比武较量」。

¹⁴ 以下に見るように大陸の連環画ではしばしば登場する悪役イギリス人レスラーのくだりが、イギリス統治下の香港で作られた霍元甲映画では、ほぼ割愛される傾向にあるのは興味深い。

¹⁵ 「幽燕」は河北省北部、北京・天津・遼寧省の地域を指す名称。

¹⁶ 同書巻頭頁。原文は以下の通り。「三侠之一的霍元甲成立精武会，击败俄国大力士的壮举，远播海外，深得中国革命者孙中山的赞许。多年来，霍元甲的传奇，众说纷云，穿凿附会者甚多。本书以翔实的史料、」伝诵于霍元甲家乡的故事为依据，编绘了这套连环画」。

- ¹⁷ 初版は1957年。2001年に春風出版社から復刻されている。今回は、同書を引く笠尾恭二『増補中国武術史大観』（国書刊行会、2019）「第五章 中国武術の展開／第四節 「国術」へ——辛亥革命と近代武術の普及発展」を参考にした。
- ¹⁸ たとえば、霍元甲が設立した上海精武体育会が前身の上海精武体育總會の公式サイトでは、同会の歴史を紹介するページで1901年にロシア人レスラー（名前は明記していない）に戦いを挑んだが逃げられたこと、1910年にイギリス人レスラーのオーピンと戦う予定だったが、やはり逃げられたことが書いてある。オーピンとの対戦予定が、陳公哲の回想録と約一年ズレている。URL は以下の通り。
<http://www.chinwoo.org.cn/page/section/25>
- ¹⁹ カーニバル・レスリングについてはマイケル・R・ボール著、江夏健一郎監訳、山田奈緒子訳『プロレス社会学——アメリカの大衆文化と儀礼ドラマ』（同文館、1993）、ショーン・アセール、マイク・ムーニハム著、菱山繁訳『WWE の独裁者——ビンス・マクマホンとアメリカン・プロレスの真実』（ベースボールマガジン社、2004）、スコット・M・ピークマン著、鳥見真生訳『リングサイド プロレスから見えるアメリカ文化の真実』（早川書房、2008）などに詳しい。
- ²⁰ 映画や連環画に見えるこの跳び蹴り表現をめぐるのは、前掲拙稿「消えた怒りの跳び蹴り——ふたつの電影連環画『霍元甲』考察——」参照。
- ²¹ 同様の記事は『時事新報』1935年7月24日の記事にも確認できる。また、『鐵報』7月26日記事中に、これは国辱であるとの社説が掲載されている。
- ²² 高嶋航はその論考「『東亜病夫』と近代中国（1896-1949）」（『近現代中国における社会経済制度の再編』、京都大学人文科学研究所、2016年2月、所収）において、清末から中華民国期における「病夫」言説（その言葉を巡る社会的文脈の変化）を丹念に追っている。その「おわりに」では、「『病夫』とは軍国民の鏡像であった。『病夫』言説は国民ひとりひとりに国家の恥を自らの恥と感じ、その恥を雪ぐために努力するよう求めた。こうして『病夫』言説は、恥の感覚を通じて、国民と国家を結びつけた。恥を雪ぐために国民がなすべきことの 하나가 身体強化であった」と分析している。また「最後に指摘しておきたいのは、肯定的な文脈で用いられる『病夫』言説が存在したことである。『病夫』言説そのものは、否定的な自画像から出発していたが、なんらかの形でその克服が示されれば、肯定的な自画像と容易に結びつくことができた」としている。
- ²³ 『武林志』については、『連環画研究』第7号執筆時に『大俠霍元甲』の連環画を扱っていた際、「こんなものもありますよ！」と藤井得弘氏にご教示いただいたものである。また、当時北海道大学大学院文学研究科修士課程在籍中の黄潤淇氏が、武田雅哉先生の連環画ゼミで同作を扱った際のレジュメ「武術で中国人が救えるだろうか——連環画『武林志』を中心に」（2017年5月15日）からも大きな示唆をいただいた。この場をお借りして、お二人には感謝を申し上げたい。
- ²⁴ 劇中写真を使用した金戈改編『武林志』上下巻（中国電影出版社、1983）、イラスト版である張占堯、宗明改編、許全群、李榮絵画『武林志』全3巻（人民体育出版社、1982）、傅溪鵬改編、劉啓端絵画『武林志』（嶺南美術出版社、1983）などがある。
- ²⁵ 映画公開前年の1982年に出版された連環画『武林志』（人民体育出版社）の冒頭の「内容提要」には、この連環画が「1981年の同名映画脚本による」と明記されている。この事実については、既に上述の黄潤淇氏によって言及されている。
- ²⁶ 天津中華武士会の面々と康泰爾との事件については、楊祥全『津門武術』（山西科学技術出版社、2013）の第四章「天津武術人物小伝」にも詳しい経緯が紹介されている。誰が直接的に康泰爾をねじ伏せたかについても諸説あり、同書ではその考察もおこなっている。
- ²⁷ 前掲『津門武術』「第二節 周恩来的武術老師韓慕俠」208-209頁参照。
- ²⁸ 1912年の平江不肖生『近代狭義英雄伝』等に、霍元甲が日本人に毒殺されたという伝説が既に見える。また、『申報』が1925年5月31日に掲載した『大力士霍元甲伝』には、霍元甲がロシア人レスラーに勝利したという記述がある。また、瀧下彩子氏からは、1930～40年代の大衆小説や映画に描かれた霍元甲作品の存在をご教示いただいた。この場をお借りして感謝を申し上げる。今回は残念ながら取り上げ切れなかったが、そのような連環画以外の諸作品についても、今後、考察していきたい。